哲学学習会①「唯物論」　長坂輝夫

１.「科学の目」＝「ものの見方・考え方」を身に付ける意味はなに？

＜この国のかたち＞

・日本国憲法の三原則；国民が国のあり方を自分たちで決める（国民主権）。人が生まれながらにして持っている権利を大事にする（基本的人権の尊重）。もめごとがあっても武力でなく話し合いで解決する（平和主義）。

・今の日本は、この憲法が生かされた社会になっているか。若者が「二重の苦しみ」（生活苦と自己責任）のもとにある現代。若者の２人に１人が非正規労働者。なぜこんな世の中になっているのか？

・1%の人が 99%の人を犠牲にしている（アメリカ発の言葉）

・基本的人権のはく奪が、国民主権と平和主義を否定する動き（＝立憲主義の否定）と深く結びつく現状（自民党憲法草案、安倍首相の策動）がある。

＜言葉で伝える力が必要＞

憲法（三原則）がめざす世界を実現するためには、「人間には言葉をもち、その言葉で気持ちや考え方を交換し合う能力がある。」（「子どもに伝える日本国憲法」井上ひさし；講談社）、その能力を発揮することだ。

言葉で伝える能力を発揮するためには、「ものの見方・考え方」を身に付けることが大切で、そうすることで、自信がわいてきて、この世の中がどのような世界なのかがつかめ、どうしたらいいのかを見通すことができる。

２．３つの質問プラス１

①あなたは、人間が生まれる前に地球があったと思いますか？

②あなたは、人間は脳の助けを借りて考えている、と思いますか？

③あなたは、他人が存在していると思いますか？

（レーニン「唯物論と経験批判論；第一章４・５・６」）

（④人間はサルから進化してきたと思いますか？）

３．唯物論と観念論

「ものの見方」はいろいろあっても、大きくは二つの見方に分けられる。

物質と精神（意識）のどちらが世界の根源をなすか。

・観念論；精神や意識が世界（自然界と社会全体）の根源をなすと見る立場

・唯物論；物質が世界（自然界と社会全体）の根源をなすと見る立場

・そう思うからこうなるというのが観念論。

観念が現実をつくるのではなく、現実が観念をつくるとするのが唯物論。

(1)誰もが自覚の有無に関わらず、日常生活や思考生活において、ごく自然に唯

物論の立場を取っている。しかし知らないうちに観念論に陥る。

・日常生活(衣食住・健康)では自然科学の成果を活用して判断し行動する。

・しかし社会の動きをどう見るかでは、観念論が幅をきかす。

(2) 唯物論は、物質と精神をどう見るか

・物質とは―――精神（意識）から独立した客観的存在

・精神（意識）とは―――脳の働きによって生み出される

・唯物論は、精神（意識）の働きをとても重視する

①目標を持つことの大切さ

②病気や体をこわした時の気持ちの持ち方

(3)不可知論としての「経験批判論・マッハ主義・実証主義」や、プラグマティズム（実用主義）は、観念論の一つ

①不可知論

・意識から独立した客観的な実在を認めていても、それを知りえないとする立場。不可知論は部分的には唯物論の側面もあり、“恥ずかしがり屋の唯物論”とも言われた（エンゲルス「空想から科学へ」)。しかし、人間の意識によって作り出されたものだけが対象となる観念論の一つ。

②経験批判論

・存在するものは経験だけだとして、唯物論も観念論も克服したとする。

・すべての知識は経験や感覚に基づくとし、意識にあらわれた限りでの経験を見るだけで、その先の客観的存在を認めない立場で観念論の一つ。

③マッハ主義

・世界はすべて「感覚の複合体」(世界要素)。感覚を主観と客観の区別のない中性的なものと言いながら、主観の感覚内容を第一義的にみる観念論。

④実証主義

・人間の経験に現われるものだけを考察し、経験として人間の意識にあらわれるものだけに限定するので、観念論となる。

⑤プラグマティズム（実用主義）

・真理は、客観的存在の反映ではなく、実践上で有効な知識のことだとする。

・経験の事実を唯一の実在として、客観的法則を認めないで、皮相的な思いつきでも、うまくいけばいいという考え方で、うまくいかなければやり方を変えればいいとする一種の観念論にすぎない。

②③⑤はどれも、唯物論と観念論を乗り越えたというが、意識に基づく経験とか感覚を第一義的にするので観念論となる。

(4)唯物論は、経験や感覚をどう見るか

・観念論と唯物論は、どちらも経験から出発している。しかし、唯物論は、経験を主観的なものとせず、経験（感覚も含む）を通して人間の意識から独立した客観的実在を認め、客観的実在を知ることができるとする。
・唯物論は、感覚を、物質が感覚器官に作用して生み出されたものとする。
・例；素粒子のクォークや、素粒子に質量を与えるヒッグス粒子

(5)日常生活の観念論の例
・血液型、
・うわさ、
・霊や「超能力」、
・「空気」と「世間」、

(6)経済学での唯物論と観念論（史的唯物論）
・唯物論；マルクス経済学
・観念論；近代経済学

(7)現代科学の発展は、弁証法的唯物論をますます豊かにする。
・宇宙論、
・素粒子論、
・医学研究、

４．理論と実践～実践するだけでは、唯物論の立場に立てるわけではない～

①心がけの問題に解消せず、本質をとらえ、実践する
・独断や先入観からではなく、客観的事実をふまえて出発すること
・どんな神秘も仮定せず、すべてをたんなる心がけの問題に解消せず、ものごとの客観的本質をとらえて実践的に働きかけること
・世界を知りうるし、変革しうるという確信をもって、不断に私たちの認識を豊かにふかめ、世界を変革する人間の能動的な力を拡大していくこと

②実践を踏まえて、理論を学ぶ
認識が深まりひろがってくると、それにつれて感情や意志までもが変わる。

③価値判断の役割
認識と実際の行動の間には価値判断が入り込む。新しい認識は新しい価値判断をもたらし、行動に変化をもたらす。

④理論と実践
理論と実践とが結びついて初めて現実を変えることができる。